苦難を乗り越えその先に

国立学園小学校　四年桜組

葛間　巧

僕は夏休みに奥多摩町の西部に位置する小河内ダムに行きました。授業で水について学んだ際、小河内ダムに関する話が出てきました。その時から夏休みに足を運んでみようと思っていました。

小河内ダムは、多摩川の上流にあります。コンクリートの壁の高さは百四十九メートル、東京ドーム百五十杯分の貯水量を有します。これは関東地方で最大の貯水量です。都民が一日に使用する水の約四十日分が貯水されています。

この広大なダムの水が様々な施設を経由し、僕の家の水道に繋がっている事を想像すると、小河内ダムの高い壁を目の前にして驚きが止まりませんでした。そして、自然の大切さと近代技術の発達を改めて感じました。

ダムとは、水を溜め、川に流れる水量を調

節したり、豊かな河川環境を守ったり、灌漑用水を蓄えておく役割があります。このダムを始め、奥多摩から山梨県に掛けて東京二十三区の三分の一以上の広大な森が広がる水道水源林、取水堰、導水路、浄水場、給水所、水道管、そして下水道に、数多くの施設が存在します。これらのどの一つが欠けても今の豊かな暮らしには辿り付いていないと僕は思います。また、この施設で働いている人の努力も忘れてはいけません。豊かな暮らしの奥には、施設で働く人の努力と近代技術の発達が幾重にも積み重なっている事を改めて痛感しました。

　しかし、日々当たり前のように使用している水ですが、この小河内ダムが建設されるにあたり、様々な犠牲を伴いました。東京の人口の急激な増加による水不足が問題視される中、地質や貯水量等をクリアできる小河内村を中心とする地域がダム建設の有力な候補地となったのです。建設の反対運動もありまし

たが、小河内ダムは十九年の時を要して、千九百五十七年に竣工されました。多くの移転を強いられたり、また、建設に携わった八十七名の尊い命が失われるという悲しい出来事もありました。

　第二次世界大戦でダム工事が五年程中断した後、旧小河内村、丹波山村、小菅村合わせて九百四十五世帯が湖底に沈みました。ほぼ全村が水没した旧小河内村の村民は、工事期間が二十年近くに及んだ事もあり、大変な心労と負担を強いられました。「夕陽は赤し、身は悲し…さらば湖底のわが村よ」はダムの近くにある歌碑の一文です。住み慣れた村を離れなければならなかった事は、とても辛い事であったと思います。

　僕は、ダム建設によって移転しなければならなくなった人々や、犠牲になった人々の気持ちを考えながら、これからも水を大切に使っていこうと思います。